

人類学／社会学される日本女性

——メタ・エスノグラフィーの試み——

北村 文

1. イメージからリアリティへ？

——日本女性研究を研究する

本論文では、アメリカを中心とする英語圏における日本女性研究、なかでも人類学・社会学の著作に焦点をあて、その内容を紹介するとともに、そこで用いられている理論的・方法論的枠組みを批判的に検討する。興味深いことに、英語で書かれた日本女性研究の著作のうち、日本語に翻訳されているのはわずか数点である（文末文献表を参照）。日本女性を対象とする研究の蓄積は、したがって、欧米のアカデミズム内部で流通するばかりで、当の日本女性の目にふれることは少ない。この断絶を破ることが、本稿の第一の目的である。

と同時に、英文テキストを翻訳し要約し、英語圏研究者の手による日本女性像をなぞりなおすだけではじゅうぶんでない。第二の目的として、本論文では、日本女性研究という営みそのものにふくまれる政治性に迫る。言うまでもなく、日本研究/Japanese studiesは、その背景にオリエンタリズムを背負っている。「日本」という存在を自己とは異なる、自己に劣る「他者」として立ち上げたうえで、「日本らしさ」なるものを追究してきた学問である。「日本」がこのように政治的に構築されているとき、「日本女性」はさらに複雑な位置に置かれる。Traise Yamamoto のことばを借りれば、「日本

女性、さらに日本女性の身体には、領有し支配する対象としての人種と性の差異が刻まれている」(Yamamoto 1999, 21-22)。この「日本女性」という二重に他者化された存在——オリエンタリズムによって、セクシズムによって——を、欧米の研究者はどのように扱ってきたのだろうか¹。

もっとも一般的な方法としては、「イメージからリアリティへ」と呼ぶべき方向性がある。それは、西洋に未だ横溢するオリエンタリスト的ステレオタイプ——日本女性はおとなしくてシャイで従属的である、というような古典的な——の打破を、女性たちの実態を描くことで目指す方向性である。歴史学の立場をとるものとしては、まず、Gail Bernstein の編書『日本女性の再構築 1600-1945』(Bernstein ed. 1991)が挙げられる。この書は、次のような前提のもとに、これまで公的言説からのみ書き起こされてきた歴史を再考する試みである。「ジェンダーに関する公的な教えが社会的現実において反映されていたと想定することは必ずしもできない。…女性たちがしたこと（そして、せずに済ませたこと）は社会的に定められた規範とは異なっていたのであり、そもそもそうした規範を遵守していたのは上流階級のごく少数に過ぎなかった」(Bernstein 1991, 4)。同様の視点から Kathleen Uno (1993) は、良妻賢母イデオロギーがそれ自体歴史的変遷を経てきている不定形なものであったこと、その運用のされ方も多様性に満ちていたことを示し、Sandra Buckely (1993) もまた、日本の戦後史をジェンダーを軸に論じ、支配的規範とその実践のあいだの「リアリティ・ギャップ」を強調している。

さらに人類学・社会学のアプローチは、こ

明治学院大学 教養教育センター

連絡先：北村 文

〒244-8539 横浜市戸塚区上倉田町 1518

kitamura@mail1.meijigakuin.ac.jp

受理日：2007年11月30日

うしたイメージとリアリティの齟齬を、エスノグラフィーの手法から暴こうとする。長期にわたるフィールドワーク、参与観察、インテンシブなインタビューなどから明らかになるのは、「日本女性らしさ」として想定されてきた特質がステレオタイプに過ぎないこと、そして日本女性間の差異——世代の、地域の、経済的な、社会的な——である。加えて、Joy Hendryは言う、「人びとの行為と、彼ら彼女らによるその行為の説明は往々にして異なるものであり、さらに、彼ら彼女らがしなければならぬと考えていることとも異なっている。時間がたつにつれ、人類学者はこの三段階のすべてを見抜けるようになるが、おそらくそれぞれに重要性がある」(Hendry 1999, ix)。このようにエスノグラフィーの方法は、異なる複数の位相にもれなく定位し、もっとも「リアルな」日本女性を描き出そうとするのである。

しかし、ここで問うべき重要な問題がある。エスノグラフィーが、ステレオタイプのイメージの超克のために提示するリアリティとは、いったい、どのような現実なのか？

研究者たちがステレオタイプを覆すための参照点として「リアリティ」を持ち出すとき、それはあたかも、誰がどのように調査をしても同じように立ち現れる絶対的なものとして考えられている。そして同時に、調査する主体である研究者自身は、眼前に横たわる現実を忠実に写し取る、透明な媒体であるかのように想定されている。エスノグラフィーとは、あたかも、現実世界にある権力作用の外で、中立的な立場から、唯一の真実を記す行為であるかのように。

こうした前提がすべて、ナイーヴな想定であることは言うまでもない。研究者がフィールドに持ち込むのは、調査機材だけではない。彼ら彼女ら自身の身体、そしてそこに付着した属性、外見、パーソナリティ、態度、そして学術的立場もある(Plummer 1983=1991)。そうした背景からするエスノグラフィーとは、James Cliffordがいうように、政治的な企てに他ならない。「肖像画を描くために文化を静止させようとする企ては、いつも単純化と排除、当座の焦点の選択、特別な自己-他者関係の構築、力関係の強要や駆け引きという問題を引き起こ

す」(Clifford 1986=1996, 17)。このとき、エスノグラフィーは果たして、絶対的な真実のみを提供することができるだろうか？そもそも、「絶対的な真実」とは？エスノグラフィーそれ自体を研究の対象とする、メタ・エスノグラフィーの試みが必要となる。

以下では、日本女性エスノグラフィーの具体例を挙げながら論を進める。まず、「イメージからリアリティへ」の視座を有する研究を概観し、その陥穽を指摘する。日本研究一般にいえる文化論的枠組みの残存を批判するとともに、ふたたび、エスノグラフィーの政治の問題に触れ、誰が、どこから、どのように、そして何のために、「リアリティ」を描くのかを考える。そして、現存するいくつかの新たな枠組みを参照することで、イメージとリアリティの二分法のジレンマを超える方策を探っていく。

2. 停滞する進歩

——「革新的日本女性」のエスノグラフィー

本節および次節で扱うのは、旧来のステレオタイプとは異なるかたちで日本女性像を描出しようとするエスノグラフィーである。標的とされているのは、「日本の女性は優しくてシャイで従順」[Ogasawara 1998: 1]、「着物に身を包んだ、繊細で従順で人形のような日本の妻」[Diggs 1998: 2]といった一連の古典的イメージであり、研究者たちは大別して二種類のアプローチからその打破を目指す。第一には、ステレオタイプから外れる、いわば例外的、進歩的な日本女性に照準するエスノグラフィーがあり、第二には、一般的に典型的日本女性とされているグループを対象とし、彼女らの生活にイメージから逸脱する要素を見いだすエスノグラフィーがある。これらの研究が提供する「リアリティ」とは、どのような現実だろうか？

伝統的役割からの脱却をはかる日本女性に照準するものとしては、まず、Susan Pharr (1981=1989) の政治活動に携わる日本女性研究が挙げられる。1970年代のフィールドワークに基づく本書では、「新伝統主義者」「新しい女たち」「急進派平等主義者」の三カテゴリーが見いだされ、政治という未踏のアリーナに進出する女性たちが焦点化されている。注意すべ

きは、Pharr が彼女のインフォーマントたちに対して下す、最終的評価である。父や夫、ボーイフレンドのために——つまりは伝統的女性役割の延長で——政治活動に参加する「新伝統主義者」は言うまでもなく、「新しい女たち」も「急進派平等主義者」も、自らの政治参加を時に隠したり、あるいは所属する政治団体内のジェンダー不平等には甘んじたりするという点で、徹底した「役割の再定義」には至っていない。彼女らもまた、他者に仕え自己を犠牲にするという日本社会における支配的ジェンダー・イデオロギーの内部に留まっている、と、Pharr は言う。

次なる「革新的日本女性」は、企業組織内に見出される。管理職女性を対象にフィールドワークを行った Jean Renshaw が明らかにするのは、日本では女性が昇進できないのではなく——実はその数は相当数にのぼる——その姿が隠されている、という事実である。なぜなら、アメリカ女性が傷つくリスクを抱えながら「ガラスの天井」を壊そうとするのに対し、日本女性は「障子のうしろを」、すなわち、「不可視のスクリーンに隠れて」通り抜けていくから (Renshaw 1999, 139)。たとえ管理職に就いても女性たちは職場での和を重んじ、「従属するか、怒りや敵意を抑圧するか、あるいは構造に闘いを挑むか、というチョイスを迫られるが、最後の選択肢がとられることはほぼない (ibid., 249-50)。この視点は Millie Creighton にも共通している。彼女はデパートをフィールドとして、そこに女性主体の文化が展開しつつあることを看取るが、その一方で、働く女性たちの向上心が低いことを指摘する。「未婚の管理職女性が数多く存在するのをみて、若い女性たちは、キャリアアップを目標にするよりもむしろ、職場での成功が幸せな結婚の妨げになるという信念を強める」(Creighton 1996, 215)。日本のキャリア・ウーマンは、したがって、第一に不可視の存在であり、第二に後継者をとまわらない、微々たる進歩の担い手でしかない。

さらに、変化する日本女性の新たな一面として注目を集めるのは、国際舞台に進出する女性たちである。Karen Ma は「現代の蝶々夫人」として、国際恋愛・結婚で自己実現を図ろうと

する女性たち取材している。彼女によれば、「日本女性は外国のものや社会的に容認されていない行為を喜々として楽しむことで…日本社会が女性に与える立場に対する不満を表しているのである」(Ma 1996, 70)。アメリカ在住の日本女性を「鉄の蝶」と呼ぶ Nancy Diggs は、彼女らの日米での生活を次のように対比する。「日本に住むということは他人からのプレッシャー——物理的な、精神的な、そして感情的な——を常にうけて生活するということであり」、したがって「アメリカ生活は彼女らにとって、日本での重荷から逃れることのできるつかの間の自由の時間である」(Diggs 1998, 125; 128)。海外から日本へ帰国した家族を対象とした Merry White (1988) の研究にも、母親の経験について同様の対比がみられる。

しかしながら、アメリカ／西洋が虐げられた日本女性を解放する、というクリシェは、それ自体がオリエンタリスト的想像であることに注意しよう。Ma や Diggs は、「前近代的で遅れた日本」と「解放的で平等なアメリカ」という図を前提として、そこに「蝶々たち」を配置する——あたかも、前者から後者への移行が常に望ましいものであるかのように。これに対して、「解放的で平等」であるはずの西洋世界で、日本女性たちがとりもなおさず劣位におかれていることを鋭く指摘するのが、Karen Kelsky である。「日本女性がいかなる努力でもって国籍を超えようとしても、成功を収めることはできない。強力な人種とジェンダーの序列は、常に彼女らを『彼女らの場所』へと押し戻す。彼女ら自身が理想化する国際的な場面でさえ、あるいはそれゆえに」(Kelsky 2001, 18)。ここから Kelsky は、国際的日本女性の抱えこむジレンマを見出す。すなわち、自由や解放を願う彼女らの西洋崇拜は、自らをエキゾチックでエロティックなものとして据えるジェンダーと人種の差別構造を強化するものに他ならない。さらに女性たちは海外に身を置くことによって個人レベルでの満足を得るかもしれないが、日本国内のジェンダー不平等は未解決のまま残されることとなる。この意味で Kelsky の描く日本女性は、1970 年代の政治活動家たちや、1980 年代後半以降の職業女性たちと同様に、最終的

には停滞する進歩を象徴しているに過ぎない、と言える²。

3. 束縛された自由

——「伝統的日本女性」のエスノグラフィー

日本女性の「ドメスティックな」領域からの脱出が矛盾や限界に満ちたものであるとされる一方で、典型的な日本女性と言われる人びとを再考する動きがある。もっとも古典的な日本女性イメージを成す「芸者」を対象とした Liza Dalby は、1970 年代に彼女自身が京都で初の外国人芸者として、文字どおりの「参与観察」を行った。Dalby は言う、「芸者のスタイルはたしかに女性的なものだが、日本女性らしさの基本とおもわれているところの弱々しさや従順さを備えてはいない」(Dalby 1983, 174)。彼女の描く芸者は、芸事に専心し高い職業意識を持ち宴を巧みに操作する、自己充足的な、むしろ「例外的な」日本女性として描かれている。

しかしながら、同様に「夜の世界」に自らバー・ホステスとして参入した Anne Allison の研究は、Dalby の主張を覆す。芸者やホステスを中心に据えた日本のナイト・ライフが、実は、企業社会における男性アイデンティティの獲得・維持の場であることを Allison は見逃さない。「象徴的にも儀式的にも、夜の世界に従事する女性たちは男性グループに仕え、彼らのあいだの絆を深める働きをする。その過程において女性たちは、構築物、型、象徴へと変えられていく」(Allison 1994, 167)。したがって、一見華やかでかつ逸脱的にみえるエンターテイナーの女性たちは、実は良妻賢母の規範内にあるのであり、その意味で芸者にせよホステスにせよ、その担うシンボリックな意味は、企業戦士たちを支える従順な妻たちと変わらない、とされる。

他方、Dalby と Allison に共通してみられるのは、「日本の主婦」を古典的なイメージどおりに捉えがちな点である。芸者やホステスと対照される彼女らは家庭的で隷属的な、まさに「良妻賢母」の権化として現れる。しかし、「日本の主婦」に関しては早くから——実に Ruth Benedict (1946=1972) の時点で——その「従順」というイメージが表面上の見せかけに過

ぎないことが指摘されてきている。Suzanne Vogel (1978) による「職業的主婦」という呼称、Takie Lebra (1984) による「家庭内女権制」の指摘など、その例は枚挙にいとまがない。また、1970 年代の東京郊外を舞台とする Anne Imamura のエスノグラフィーは、女性たちの活動的な生活——趣味、母親間ネットワークから政治活動まで——を描き出している。と同時に Imamura は言う、「政治活動であれ、茶道であれ、主婦が従事する活動はいずれも、よりよい主婦になるためのものに過ぎず、もし主婦役割とのあいだに軋轢が生じれば、直ちに棄却されるのは家庭外の活動のほうである」(Imamura 1987, 129)。Joy Hendry も、その長期に渡る日本でのフィールドワークから、日本の主婦の社会的地位の高さを強調し、彼女らが家庭における役割を最優先することに幸福を感じている、と論じる。

しかし、Hendry がさらに指摘するように、「こうした専業主婦業は、実のところ、平均以上の社会階層にのみ許された役割である」(Hendry 1993, 239-40)。Glenda Roberts による女性ブルーカラー労働者のエスノグラフィーは、階層というファクターにも注意を払い、日本の主婦の多様性に迫っている。これら多くの女性たちにとって仕事は、自己実現の手段であるよりも経済的に必要な労働であり、しかし同時に、家事との両立があるために全力を傾けることのできないものでもある。工場労働に携わる兼業主婦の状況を Roberts は次のように記す、「彼女らのパートタイム労働は家庭経済と分ち難く結びついていた。すなわち、この女性たちもまた…テレビや映画や広告に出てくる家族のように振舞いたいのである。」(Roberts 1994, 70)。この描写は、Anne Imamura が専業主婦の余暇活動について述べたことと共通する。すなわち日本の主婦は、政治的・文化的・経済的活動に従事するときもやはり、良妻賢母の枠内にとどまっているのである。

このように排他的なまでに家庭性を付された日本の主婦たちを、グローバル化という文脈のなかで論じるのが Sawa Kurotani である。彼女によれば、夫のアメリカ駐在に同行した日本の主婦たちは、「日本的な家庭」という「内」

をアメリカという「外」においてつくり出すことを期待される。したがって女性たちは、日本にいるときよりもさらに家庭内に閉じ込められることになるが、しかし同時にアメリカでの生活をとおして、家族のなかに、そして自らのなかに変化を見出してもいく。夫の家事参加や家族の時間の増加を喜ぶ女性たちのいっぽうで、新たな目標を見出したり、アメリカに留まることを決めたり、さらには離婚に踏み切る女性たちがいるが、Kurotani はこれら「予測外の効果」を強調するいっぽうで、こう付け加えることも忘れない。「大多数の日本の妻たちは、こうした変化の瞬間を、部分的に認識し私に語ったが、たいていの場合、彼女らの意識は不完全で不明瞭で、一時的なものだった。特に海外駐在が終わりに近づくとき、彼女らはこうした変化の可能性に背を向け、注意を帰国問題のほうへ傾けるのだった」(Kurotani 2005, 193)。主婦たちの変化や逸脱もまた、限られたものに過ぎない。

さらに、企業における「女房役」であるOLは、興味深いほどに、主婦とパラレルに描写されている。日本研究においてOLは、日本の企業文化やジェンダー不平等を象徴する例として論じられてきた。たとえばJames McLendonは、商社でのフィールドワークから、補助的で反復的な「女性の仕事」の存在に注目する。さらに、若い女性にとって仕事は「結婚への通り道」でしかなく、年配の未婚女性にとっては「暗い細道」であるとし、「このパターンは、日本の会社ならほどこででも見受けられる」と言う(McLendon 1983, 178)。さらにSumiko Iwaoはここに若い女性の側の積極的な関与をみる。「女性たちは自らを短期的な、キャリアとは無縁の社員であり、男性と同等の責任を負う必要はないと考えているので、男女の分業を肯定していた(そして今もしている)ようである」(Iwao 1993, 156)。

他方、こうした古典的なOL論を刷新する視角も現れてきている。Andrew Painter (1996)はテレビ局のフィールドワークで、同様に女性にとって不利な職場状況を観察するが、そのうえで、派遣女子社員たちが上司をからかい、職場を遊びの場に変え、既存の権力関係をパロディ化してしまう様子に注目する。こうした支配

者と被支配者のあいだの転倒関係を主題に据えるのがYuko Ogasawara (1999)による東京の銀行におけるエスノグラフィーである。彼女の描く「オフィスの花たち」は、ゴシップやボイコットといった戦略をとおして職場の日常生活を実は支配していた。しかし、PainterもOgasawaraも、こうした「レジスタンス」に対して楽観的ではない。なぜなら、「テレビ業界の階層的構造は周到に張りめぐらされており、職場での遊びや融通に行き過ぎがないよう、常に見張っている」から(Painter 1996, 54)、そしてさらには、「反抗的なOLたちは、皮肉なことに、伝統的なジェンダー関係を強化してしまう。男性にはむかうことで彼女らは、[女性は感情的で非合理的で重要な仕事を任せるわけにはいかない、という]伝統的なジェンダー役割を演じてしまっている」から(Ogasawara 1999, 162[]内引用者註)。女性たちの日常的レジスタンスは、したがって、組織内のジェンダー不平等を是正するような大きな変革には結びつかない。OLたちもまた、主婦たちと同様に、囲いこまれたなかでの自由を享受しているに過ぎない。

4. 誰が、どこから、どのように見るのか

——エスノグラフィーの政治

以上から明らかのように、日本女性のエスノグラフィーが描き出す「リアリティ」は、きわめてアンビバレントなものである。たしかに、古典的なイメージを体現するような「完璧な日本女性」はもはやどこにもいない(White 2002)。しかしその後には導かれる結論は、「革新的な日本女性」であってもその規範からの逸脱は不完全であった、そして「伝統的な日本女性」は活動的・自律的に見える一方でやはり既存のジェンダー規範の抑圧のなかにいる、という悲観的なものであった。これは明らかにジレンマである。研究者たちは古典的なステレオタイプに反駁するため、日本女性をよりよく理解しようとしてフィールドに乗り出したはずだ。しかしそこで彼女らが出会ったのは、とりもなおさず「日本女性らしさ」を残存させた日本女性たちであり、その結果、彼女らのエスノグラフィーは、打破すべきであったイメージを追認して

しまう。それはつまり、日本女性はあくまでも「日本女性らしい」ということを意味するのだろうか？

言うまでもなく、このような結論は性急にすぎる。第一の問題は、日本女性研究においては未だに日本文化論の枠組みが根強いということにある。フィールドワークで得られたデータが、「和」「均一性」「縦社会」「集団主義」「甘え」などのクリシェを用いて理解されていることは少なくない。こうした文化主義的枠組みの問題点はすでに多く論じられてきているが³、欧米の日本研究内部においてもその声は聞かれ始めている。たとえばBrian Moeran (1990) はEdward W. Saidのオリエンタリズム概念を援用し、日本研究においては「ジャパニズム」ともいえる文化的差異の構築が行われてきたと批判する。また、Daniel Ben-Ami は日本文化論の本質主義的傾向を以下のように鋭く論じる。「現代において、生物学的あるいは明らかに人種的な議論を試みるような愚かな論者はいないだろう、その代わりに、文化的差異の名のもとに議論が枠づけられている」(Ben-Ami 1997, 9)。文化的差異を前提として進められる議論は、当然ながら文化的差異に行き着く。こうした学的磁場のうえでなされるエスノグラフィーはつまるところ、「日本女性は日本女性らしい、なぜなら彼女らは日本女性だから」と繰り返しているに過ぎない。

第二の問題もその延長上にある。日本女性研究者の多数を占める西洋の——往々にして白人の、中上流階級の——女性研究者たちは、フェミニズムの関心をフィールドに持ち込む傾向がある。すなわち、日本社会におけるジェンダー不平等を問題とし、インフォーマントである女性たちをそのフェミニストの意識の高さに沿って評価する。そして多くの場合、上にみたように、日本女性たちはまだまだ不徹底で煮え切らない、とされる——なぜなら彼女らの生活には何らかのかたちで良妻賢母イデオロギーが残存しているから。日本のジェンダー構造そのものを根本から変革しない限り、あるいはそうした意図を一貫して口にし続けられない限り、日本女性は、奥ゆかしい日本女性のラベルを返上することができない仕組みになっている。

フェミニスト的権威は、いくつかのエスノグラフィーに濃い影をおとしている。Liza Dalbyの芸者研究は、先述のように、芸者が普通の日本女性とは異なる自立した、「特別な」日本女性であることを強調する。しかし、芸者のひとりには彼女に反論する、「どうして芸者の研究なんかするの？ 芸者も他の普通の女の人たちと同じなのに」。このことばを、Dalbyは次のように退ける、「そのままに同じ夜、彼女はアクロバットな舞を披露し、お客さんの箸から食べ物をかじり、ばかみたいに酔っぱらった。どんな普通の日本女性がこんなことをすると言うのだろうか？」(Dalby 1983, 141)。研究者がもちこんだ「普通の/特別な」という区別は、このように、インフォーマント自身から疑義が呈されてもなお、維持される。また、国際的日本女性を対象としたKaren Kelskyも、実際の国際結婚経験者から反発をうけたエピソードを記している。「私の結婚に人種の問題がかかわっているなんて、どうしてあなたに言われなければならないの？ 私がXを好きなのは彼がXだからであって、白人だからではありません」(Kelsky 2001, 146)。自身とインフォーマントたちのあいだに横たわる明らかな齟齬に対し、Kelskyは、彼女を批判的に「たまたまガイジン論者」と呼ぶのみである。研究者からの一方的なラベリングを拒もうとする日本女性たちの声は、こうしてかき消される——研究者の学的主張のために。

日本社会のジェンダー不平等構造とその是正に最大の関心を払い、日本女性の不徹底な態度に失望する、そのフェミニスト的関心はいったい誰のものかを問わなければならない。女性たちが彼女らの身の周りの日常的問題に対峙するとき、それがじゅうぶんに革命的でないと批判する、あるいはそれは従属であるとか抵抗であるとか断じる、その位置とは？ ここには、女性と女性のあいだの権力構造をみるができるだろう。西洋、そして学問的権威を背景にした研究者たちが、被調査者にたいして不可避免的にもつ優位性を見逃してはならない⁴。

以上を考慮にいれると、本来リアリティに迫ることを目指したエスノグラフィーがその実、日本女性を権力的にまなざす支配的構造の内部

に留まるものであることに加え、学問的権威の問題を抱えてもいることがわかる。エスノグラフィーは、ただ他者の生活や経験を記述するという単線的な行為ではなく、ひとつの視点からリアリティを構築する作業である。誰が、どこから、どのように、何のために、書くのか。この、エスノグラファーの位置性/positionalityの問題を鍵に、研究者の前提や期待が循環するだけのエスノグラフィーからの脱却を試みよう。

5. アイデンティティの交渉

——「攪乱する日本女性」のエスノグラフィー

ここで立ち戻るべきは、社会的現実が相互行為のなかで構成されるものであること (Berger & Luckmann 1966=1977)、そしてエスノグラフィーもまた、調査者と被調査者とのあいだの双方向的なダイナミクスの所産であるということである。そのときエスノグラファーは、インサイダーとアウトサイダーの位置を自由に行き来する、あるいは客観性や中立性という要塞のなかに身を潜めた、透明な存在たりえない。彼女らもまた、フィールド内の社会関係に絡めとられており、その存在は権威的であるとともに被傷性/vulnerabilityをとまなう (Behar 1996)。たとえば、Gail Bernsteinは、農村でのフィールド経験を省みて言う、「参与観察者でしようという私の考えは、あまりにもナイーブなものだった。私の研究対象者たちは私のことを観察していたのである。どこへ行っても、私は人びとの注目の的だった」(Bernstein 1983, 31)。エスノグラファーが自らの脆く危うい位置を明らかにし、そこから生じる社会的過程に言及しはじめるとき、そこに表される「リアリティ」は、これまでとは別の様相を呈しはじめる。

この点においてもっとも重要なのが、Dorinne Kondoによる東京下町の和菓子工場におけるエスノグラフィーである。自らも地域の住民として、工場のパートタイマーとして参与観察しようとする Kondo が経験するのは、彼女自身のアイデンティティ——日系アメリカ人としての、女性としての、人類学者としての——の危機である。近所の住民や工場の同僚が Kondo を扱う方法は、往々にして彼女自

身の自己定義と齟齬する。そして Kondo は気づく、「アイデンティティは『もの』ではない、交渉され、開かれ、流動し、あいまいな、文化的意味が日常生活のなかで表出された結果なのである」(Kondo 1990, 24)。こうした視角から、Kondo は工場におけるジェンダーの「表出」に鋭い分析を加える。たとえばパートタイマーの女性たちは、前出のエスノグラフィーのなかの「日本女性らしい日本女性たち」と同様に、職場での差別や不利な状況に正面から挑戦しようとはせず、むしろ求められる女性像を演じる。これに対して Kondo は言う、

こうした状況に「抵抗」とか「従属」とかいうことばは当てはまらない。なぜなら明白な抵抗はつねに結託や妥協の危機にさらされているものだし、従属が意図せざる攪乱の効果をもつこともあるからである。女性たちは従来どおりのジェンダー・アイデンティティを敢えて演じることによってのみ、構造上の周辺から中心へと自らを移すことができるのである。(Kondo 1990, 299)

Kondo は、これら女性たちが文化的なジェンダー規範から自由でないことを忘れてはいない。しかし同時に、彼女らがその立たされた位置——パートタイマーという、そして既婚の中年女性という位置——から行為し、そのアイデンティティを表出するなかで、その交渉過程が、既存の構造にノイズをもたらす可能性もあることを指摘する。これはすなわち、Judith Butler のいう「セックスやジェンダーが構築物であるからこそ存在する可能性」である。「セックスとジェンダーに関する規制的な虚構が、幾重に相争う意味の場であるならば、この構築の多層性自体が、その単声的な姿勢を破壊する可能性を与えるものとなる」(Butler 1990=1999, 71)。こうした多義的な「日本女性」の表出をこそ見ていかなければならない。

同様の視座は、Robin LeBlanc にも援用されている。日本の主婦の政治活動を観察するなかで彼女は、既存の主婦役割を超えた活動をする女性活動家たちたちが、「普通的主婦」アイデ

ンティティに固執する様子に着目する。前出のエスノグラフィーにおいては、こうした自己呈示は良妻賢母への回帰として分析されていたが、LeBlancはその背後にある戦略性を見逃さない。『主婦』は使い勝手のよいラベルなのである。女性たちは家庭の外に出るとき、自らのコミットメントや専門性を端的に示してくれる主婦というアイデンティティを利用する』（LeBlanc 1999, 32）。女性たちは社会から与えられた位置を離れずとも、それを戦略的に用いることで、内部から攪乱していくのである。

最後に、1970年代から1990年代まで、都市と地方で、さまざまな職業の女性を対象としてフィールドワークを行ってきた Nancy Rosenberger の仕事をとりあげよう。その前提は、「人びとは、自らを形成しようとする力と常に交渉関係にある」というものである（Rosenberger 2001, 4）。女性たちと公私の場面を共有するなかで、Rosenberger は彼女らの行為や発話の操作性に着目する。

ステージの表と裏で彼女らのパーソナリティは異なることがある——両者はせめぎあい、補いあい、攪乱しあい、重なりあっている。女性たちは定められたジェンダー・パフォーマンスを習得しているので、ステージ上の演技に自己を投じ、同時にそれを自己の一部にしていく。しかし同時に、彼女らは意識的な演技者でもあるから、自分の演技が他者とのような関係にあるのか、そして自分は重層的なステージのどこに位置しているのかを、いつも見定めている。（Rosenberger 2001, 60）

このように捉え返される日本女性のリアリティは、折り重なる複数のダイナミクス——調査者と被調査者とのあいだの非対称な関係も含めて——をともなって立ち現れる。それはステレオタイプのイメージを完全に覆すものではないが、だからといって、そこに回収しきれものでもない（Kitamura 2005）。

こうした細やかな視点からするエスノグラフィーは、単純で性急な結論に陥らず、その複

雑性・多元性ゆえによりいっそう「リアルな」日本女性像を提供する。

6. イメージ/リアリティを超えて

——結語

以上では、すでに相当の蓄積のある日本女性研究のうち、人類学・社会学的エスノグラフィーの手法をとるものを中心にみてきた。まず明らかとなったのは、「イメージからリアリティへ」の移行を目指すエスノグラフィーのジレンマであった。研究者たちは古典的なステレオタイプを否定することを目指してそれぞれのフィールドへ赴くが、往々にして、女性たちの経験や生活を自らの学問的／政治的関心のもとにおいてのみ解釈し、その結果単純化し、静態的な記述に行き着く——そうした一面的な日本女性像からの離脱をこそ試みたにもかかわらず。しかしエスノグラフィーは、オリエンタリズムやセクシズムや学術的権威という権力作用の外からなされるわけではない。誰が、どこから、どのように書くのか——調査者の占める位置性/positionalityの問題があった。錯綜する人間関係、そこに不可避的に生じる序列とその交渉過程を、すなわち自らの位置を可視化しながら書くエスノグラフィーに新たな方向性をみることができた。

ここで確認すべきはふたつのことである。まず、Kondo や LeBlanc、Rosenberger のように、フィールド内の社会関係のただ中からするエスノグラフィーは、日本女性たちが自ら語ることば、彼女ら自身による解釈や価値づけに、最大の注意を払う——その戦略や操作性、矛盾や非一貫性も含めて。そうして再構成されるリアリティは、研究者の前提や期待をただ反復するのではなく、女性たちのエージェンシーをも示唆するものであった。

次に、イメージとリアリティの二項対立の図を再考することができる。リアリティを描くことでイメージを否定しようとしたエスノグラフィーは、二者があたかも分断可能なふたつの実体であるかのように想定していた。しかし、いくつかのエスノグラフィーがすでに明らかにしたように、イメージ——社会的役割や規範、期待を含む——は、女性たちのリアリティ——

生活、経験、アイデンティティ——のなかで、生きられている。したがって「日本女性らしさ」をまったくの虚構として退けることはできない、なぜならそれは、リアリティの重要な一部を成しているから。しかし同時に、イメージにせよリアリティにせよ、それらは絶対的な完成体ではなく、相互行為のなかでそのつど達成されている。「日本女性らしさ」がいかに経験され表出され、そしてそのなかで保持されあるいは攪乱されていくのか、それを具さにみとる視座が必要である。そこで再構成される日本女性の「リアリティ」は、それ自体が日本女性研究の枠組みを内側から攪乱する、新たな表象の政治の試みとなるだろう。

参考／引用文献

- Allison, Anne. 1994. *Nightwork: Sexuality, Pleasure and Corporate Masculinity in a Tokyo Hostess Club*. Chicago: University of Chicago Press.
- ベフ・ハルミ. 1987. 『イデオロギーとしての日本文化論』 思想の科学社.
- Behar, Ruth. 1996. *The Vulnerable Observer: An Anthropology that Breaks Your Heart*. Boston: Beacon Press.
- Benedict, Ruth. 1946. *The Chrysanthemum and the Sword: Patterns of Japanese Culture*. Boston: Houghton Mifflin. = 長谷川松治訳. 1972. 『菊と刀：日本文化の型』、社会思想社.
- Berger, Peter L. & Thomas Luckmann. 1966. *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*. New York: Doubleday. = 山口節郎訳. 1977. 『日常世界の構成：アイデンティティと社会の弁証法』 新曜社.
- Bernstein, Gail Lee. 1983. *Haruko's World: A Japanese Farm Woman and Her Community*. Stanford: Stanford University Press.
- Bernstein, Gail Lee ed. 1991. *Recreating Japanese Women, 1600-1945*. Berkeley: University of California Press.
- Butler, Judith. 1990. *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. New York: Routledge. = 竹村和子訳. 1999. 『ジェンダートラブル：フェミニズムとアイデンティティの攪乱』 青土社.
- Clifford, James. 1986. "Introduction: Partial Reality." In James Clifford and George E. Marcus eds. *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*. Berkeley: University of California Press. = 「序論：部分的真実」 春日直樹ほか訳 1996. 『文化を書く』 紀伊國屋書店.
- Creighton, Millie R. 1996. "Marriage, Motherhood, and Career Management in a Japanese 'Counter Culture.'" Pp. 192-220 in Anne E. Imamura, ed., *Re-Imaging Japanese Women*. Berkeley: University of California Press.
- Dalby, Liza C. 1983. *Geisha*. Berkeley: University of California Press.
- Diggs, Nancy B. 1998. *Steel Butterflies: Japanese Women and the American Experience*. Albany: State University of New York Press.
- Hendry, Joy. 1993. "The Role of the Professional Housewife." Pp. 224-241 in Janet Hunter ed., *Japanese Women Working*. London: Routledge.
- Imamura, Anne E. 1987. *Urban Japanese Housewives:*

- At Home and in the Community*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Iwao, Sumiko. 1993. *The Japanese Woman: Traditional Image and Changing Reality*. New York: Free Press.
- Kelsky, Karen. 2001. *Women on the Verge: Japanese Women, Western Dreams*. Durham: Duke University Press.
- Kitamura, Aya. 2005. "Subverting from Within: Images and Identities of Japanese Women." Pp. 37-59 in *U.S.-Japan Women's Journal* (29).
- 北村 文. 2006. 「女が女を語る時、女が女に語る時: フェミニスト・エスノグラフィーの(不)可能性」 Pp. 3-26. 『ジェンダー研究』 9.
- Kondo, Dorinne K. 1990. *Crafting Selves: Power, Gender, and Discourses of Identity in a Japanese Workplace*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Kurotani, Sawa. 2005. *Home Away from Home: Japanese Corporate Wives in the United States*. Durham: Duke University Press.
- Kuzume, Yoshi. 1990. "Images of Japanese Women in U.S. Writings and Scholarly Works, 1860-1990: Formation and Transformation of Stereotypes." Pp. 56-81 in *U.S.-Japan Women's Journal* (8).
- LeBlanc, Robin M. 1999. *Bicycle Citizens: The Political World of the Japanese Housewife*. Berkeley: University of California Press.
- Lebra, Takie S. 1984. *Japanese Women: Constraint and Fulfillment*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Ma, Karen. 1996. *The Modern Japanese Butterfly: Fantasy and Reality in Japanese Cross-Cultural Relationships*. Tokyo: Charles E. Tuttle.
- McLendon, James. 1983. "The Office: Way Station or Blind Alley?" Pp.156-182 in David W. Plath ed., *Work and Lifecourse in Japan*. Albany: State University of New York Press.
- Miller, Laura and Jan Bardsley. 2005. "Introduction." Pp.1-13 in Laura Miller and Jan Bardsley eds. *Bad Girls of Japan*. New York: Palgrave.
- Miller, Laura and Jan Bardsley eds. 2005. *Bad Girls of Japan*. New York: Palgrave.
- Moeran, Brian. 1990. "Introduction: Rapt Discourses: Anthropology, Japanism, and Japan." Pp. 1-17 in Ben-Ari, Eyal, Brian Moeran and James Valentine eds. *Unwrapping Japan: Society and Culture in Anthropological Perspective*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Ogasawara, Yuko. 1998. *Office Ladies and Salaried Men: Power, Gender, and Work in Japanese Companies*. Berkeley: University of California Press.
- Painter, Andrew A. 1996. "The Telerepresentation of Gender in Japan." Pp. 46-72 in Anne E. Imamura, ed., *Re-Imaging Japanese Women*. Berkeley: University of California Press.
- Pharr, Susan J. 1981. *Political Women in Japan: The Search for a Place in Political Life*. Berkeley: University of California Press.= 賀谷恵美子訳. 1989. 『日本の女性活動家』 勁草書房.
- Plummer, Ken. 1983. *Documents of Life: An Introduction to the Problems and Literature of a Humanistic Method*. London: George Allen & Unwin.= 原田勝弘, 川合隆男・下田平裕身監訳. 1991. 『生活記録の社会学: 方法としての生活史研究案内』 光生館.
- Renshaw, Jean R. 1999. *Kimono in the Boardroom: The Invisible Evolution of Japanese Women Managers*. New York: Oxford University Press.
- Roberts, Glenda S. 1994. *Staying on the Line: Blue-Collar Women in Contemporary Japan*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Rosenberger, Nancy R. 2001. *Gambling with Virtue: Japanese Women and the Search for Self in a Changing Nation*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- 杉本良夫. 1996. 「日本文化という神話」 井上俊ほか編 『岩波講座現代社会学 23 日本文化の社会学』 岩波書店.
- Suzuki, Nobue. 2005. "Filipina Modern: 'Bad' Filipino Women in Japan." Pp. 159-173 in Laura Miller and Jan Bardsley eds. *Bad Girls of Japan*. New York: Palgrave.
- Tamanoi, Mariko Asano. 1998. *Under the Shadow of Nationalism: Politics and Poetics of Rural Japanese Women*. Honolulu, University of Hawaii Press.
- Vogel, Suzanne H. 1978. "The Professional Housewife." Pp. 150-155 in Mary I. White and Barbara Maloney, eds., *Proceedings of the Tokyo Symposium on Women*. Tokyo: International Group for the Study of Women.
- White, Merry I. 1988. *The Japanese Overseas: Can They Go Home Again?* Princeton: Princeton University Press.
- White, Merry I. 2002. *Perfectly Japanese: Making*

Families in an Era of Upheaval. Berkeley: University of California Press.

Yamamoto, Traise. 1999. *Masking Selves, Making Subjects: Japanese American Women, Identity, and the Body*. Berkeley: University of California Press.

注釈

- 1 表象分析の手法からこの問題に挑む研究も多い。Yoshi Kuzume (1990) による1860年から1970年代までのアメリカ知識者層による日本女性論分析、Mariko Tamanoi (1998) による明治から現代にかけての農村女性表象分析、Traise Yamamoto (1999) による戦後のアメリカ映画分析、およびKaren Kelsky (2001) による日本国内外のメディア言説分析など。いずれの議論においても、問題視されているのはオリエンタリズムとセクシズムが交差する表象の権力作用である。
- 2 Laura Miller と Jan Bardsley 編集の『日本の悪い女たち』(Miller and Bardsley eds. 2005) も「革新的日本女性」を主題に据えている。本書は執筆者の多くが歴史学者あるいは文学者であるため、エスノグラフィーの要素はきわめて少ないが、歴史的物事／人物から現代のポピュラー・カルチャーまで多彩な例を挙げながら、「悪い女たちが、無秩序と機能不全の代表として、確立された理想的な規範や礼儀の先を指示し、容易な定義に抵抗し、拘束には反抗する」様態を描こうとする (Miller and Bardsley 2005, 2)。しかしながら、これらセンセーショナルなほどに「悪い」日本女性の描写が、ただちにステレオタイプを覆せるわけではない。編者らも言うように、本書が焦点化するの、女性たちの「悪い」行いの背後にある「良いとされていることの境界、彼女らを相応の場所に囲い込むために設置された境界」(ibid., 7)、すなわち日本社会のジェンダー構造の側である。したがって、たしかに日本にも「悪い女たち」はいるが、彼女らはたいていの場合、特権的な自由——たとえば少女期の、あるいはアーティストとしての——を謳歌するのみか、再び規範の側に押し戻されるか、あるいは相応に罰せられ破滅していくか、である。いずれにせよ彼女らは少数派に過ぎず、本書は、彼女らの背後には大多数の「良い」日本女性がいることを逆説的に証拠立ててしまう。

唯一例外的に、Nobue Suzuki が日本におけるフィリピン人女性のエスノグラフィーを行っており、女性たち自身のことばに基づく「リアリティ」

の再構築を行っている。特に女性たちが劣位の状況から戦略を駆使し、既存のジェンダーとナショナリティの序列を攪乱する様態は重要である。「様々な隷属化によって主体化される一方で、フィリピーナたちは新しい意味を生み出し、生活のなかの諸関係——愛情面での、物質面での——を再編成している」(Suzuki 2005, 160)。この主張は本論文の第5節と関連している。

- 3 ペフ・ハルミによるイデオロギー性の指摘(1987)、杉本良夫による排他的エスノセントリズムの指摘など(1996)。
- 4 調査者と被調査者がたとえ女性どうしであったとしても、その間には必ず非対称な関係が生じる——この問題は、「女による、女のための」方法であったはずのフェミニスト・エスノグラフィーが、長く直面してきたものである。北村(2006)を参照。